青春の記録5／未知への飛翔／冒険と放

青春の記録 5

# 知への飛翔

## ――冒険と放浪

解説　小田　実

三一書房

青春の記録 5 未知への飛翔　編者 小田実

一九六七年十二月二十日 第一版発行　定価 四六〇円

発行者 竹村一
印刷所 同興印刷株式会社
製本所 有限会社 佐伯製本所
株式会社 三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三一三一～五番
振替東京八四一六〇番

©一九六七年

# 未知への飛翔——冒険と放浪　目次


## I　政治のなかの冒険者たち　4

回顧録　6　吉田松陰
三十三年の夢　29　宮崎滔天
スペイン革命の日本人　46　石垣綾子
恵庭事件　56　野崎美晴
野崎健美

## II　人間が自然のなかを行く　80

富士案内　82　野中　至
カチン族の首かご　95　妹尾隆彦
ヤワイヤ号の冒険　136　大浦範行
雪と岩のなかで—遭難—　174　芳野満彦

## III　文明のなか、その果てで　194

中亜探検　196　橘　瑞超
アラビア遊牧民　214　本多勝一

対話のある旅　241　斎藤雅子
何でも見てやろう　261　小田実
解説　297　小田実

コラム

投夷書　吉田松陰　19
スペイン革命の思い出　坂井米夫　50
全学連モスクワに奮戦す　高木徹　71
風雪のビバーク　松濤明　87
「神風」を駆りて　飯沼正風　116
フィリピンの海底に潜る　渡辺彰二　151
ケチュア族の薬と呪術　吉田集而　228
ボクの音楽武者修行　小沢征爾　278

扉写真構成——東千賀

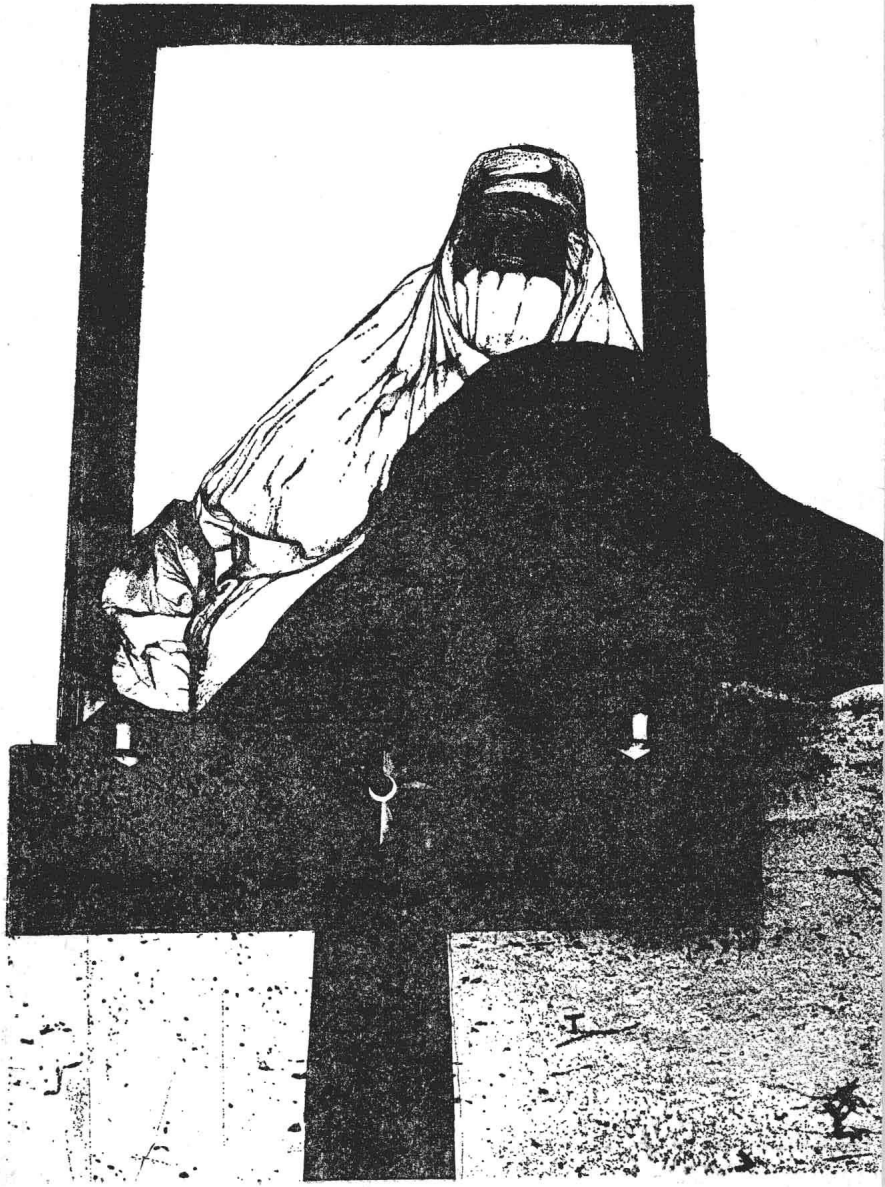
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青春の記録5

# 未知への飛翔——冒険と放浪

# I 政治のなかの冒険者たち


回顧録　吉田松陰
三十三年の夢　宮崎滔天
スペイン革命の日本人　石垣綾子
恵庭事件　野崎美晴
野崎健美



# 回顧録

吉田松陰

吉田松陰は天保元年（一八三〇）長州藩士杉百合之助の次男に生まれた。兵学師範の吉田家の養子となり、嘉永四年（一八五一）江戸に赴き、佐久間象山・山鹿素行らに師事した。嘉永七年（一八五四）ペリーが再来したが、江戸で遊学中だった松陰は、従来の日本の軍学では、とうてい黒船の武力に敵しえないことを悟り、その強大な軍事力を可能にする社会を自分の目で確かめようと、渡米を決意した。そのため同年三月、国禁を犯して下田沖に停泊中のペリー艦隊に小舟をこぎ寄せ乗り込んだが失敗。ために長州萩の野山獄に幽閉された。のち杉家に禁固の身となったが、松下村塾を主宰、塾からは高杉晋作・久坂玄瑞らの維新の志士が輩出した。安政六年井伊直弼の安政の大獄で刑死。

本書に収録した『回顧録』は、密行を決行した翌年の安政二年（一八五五）三月から八月までの間に、野山獄で当時を思い起こして、前後の模様を日記体で記録したものを、現代文に書き下したものである。

長州萩の野山獄に幽閉された身で、三月三日を迎えた。去年のことを回想すれば、感慨胸に迫り、じっとしておれない気持で、当時のことを日を追って、日記風に記録することにした。

**去年三月三日**　上天気。アメリカ船が神奈川沖に停泊してから、ずいぶん日数がたっている（一八五三年六月三日にペリー来航。これは翌年の三月のことだから、一〇カ月ほど過ぎたことになる・注）。儒者の林大学頭以下、幕府役人は、数度の交渉を行なっていた。しかしこの時期にいたっては、もうすでに和親通商のことも、ほぼ決定したのだという噂が、もっぱらであった（この日、林大学頭はペリーと日米和親条約を調印・注）。

だからこのまま日本にいても、もはや打つ手もないので、一日も早く外国に渡り、諸外国の実情を勉強するのが、一番いいことだと、渋木松太郎（松陰門下、金子重輔の変名。松陰とペリー艦乗り込みに同行した。のち萩で獄死・注）とその決行を約束したが、他の仲間にはまだ語っていない。

今日、昔よく郊外を散策したことを思い出したので、向島・白髭・梅稗（江戸の桜の名所・注）――のあたりに行こうと、仲間がみんな集まって、鳥山の家に押し

かけた。彼もそれは名案だと賛成し、一緒に出かける。

抜けるような青空に、白い雲が流れ、花が開いた桜はその美を誇り、草木のあいだに飛びかう蝶も、そのあでやかさを競っていた。このあまりの平和な光景は、目に痛いほどだったから「楽(たのしい)極まりて哀(かなしみ)を生ず」の言葉通りの感慨にひたった。

その悲しみの一つの原因は、もし自分が海外で命を失えば(この時すでにアメリカ船に乗り込む覚悟をしていた・注)花の江戸の、今見ているこの光景も再び見ることは出来ない、ということから起こるものであった。もう一つには、外国船がこの近くの神奈川に停泊しているというのに、子供たちや女性は、それが国家にとっての一大事であることも知らず、楽しそうに花に迷う蝶と一緒に飛びはね、柳の枝にこびる鶯と一緒に歌っていることが、浅はかに思われ、悲しかった。

もちろんそんなことは、少しも顔色にも言葉にも現わさなかった。夜になってようやく皆が腰をあげた。同行者、鳥山・宮部(鼎蔵)・永鳥(三平)・白井(小助)・渋木・末松(孫太郎)・梅田(雲浜)・村上(寛斎)・佐々(淳二郎)・野口(直之允)・内田らほか十数名。全員の名前は記憶にない。

**四日** 朝、藩邸(江戸の長州藩上屋敷・注)に行き、秋良(敦之助)を訪ねる。外国船で渡航する意志であることを彼に語り、ついでにその費用の借金を頼む。秋良はこの壮挙に賛成の意を示し、金は用意しておくから、あとで取りに来るようにと言ってくれた。

兄(実家の長兄杉梅太郎、松陰は吉田家の養子・注)の家に行き、「鎌倉に隠れ住んで、読書に専心しようと思います」と嘘をいった。まえから兄は、寅(松陰・注)が狂暴なのを心配していて、あまりそうした性質が表に出ないよう、何度も何度も注意していたのである。しかし航海のことは、もう去年から決意していたことであったから、今のように時勢を眺めて、決行を踏み留まっているのは、本意ではなかった。

だからもし、アメリカ人を打ち払うために立ち上がるのなら、もとより死を覚悟でそれに参加をし、また大平無事におわるのなら、進んで海外の知識を得、国家にむくいたいと思っているほどであった。だから、人と議論をするときも、国策を論じるときも、全力で事にあたり、他人から恨まれ嫌われることなどを気にかけたり、重刑を恐れたりすることなどなく、また富や地位に心を動かすことも考えたことはなかった。

それだから、ぼくの書いたものを読んだり、話すことを聞いたりした人は、誰でもぼくを過激な奴だと思

うのが当然なのである。兄の厚意にそむいて嘘をついていたのも、この性質のためだった。

しかし鎌倉へ行くといったら、兄は非常に喜び、その様子がまた一通りのものではなかったから、この時ばかりは、さすがに狂暴な寅も胸中どんな想いでいたか、どうかお察し頂きたい。

それから寅は兄へ、次のような誓文をさし出した。すなわち、

この安政元年（一八五四・注）より文久二年（一八六二・注）まで、天下国家についての議論はいたしません。蘇秦・張儀の術（全国各地にアジ演説をやること・注）はいたしません。ただ引きこもって本の虫になり、積極的な行動としては、全国を遍歴し、世の中の情勢をつぶさに見て、今後、国家に貢献できる基礎を築きたいと思うだけです。富士山が崩れても、利根川が涸れても、誓ってこの言葉にそむきません。

安政三年三月四日書す。　吉田寅次郎矩方

杉梅太郎殿

と書き、小柄を抜き、指を刺して鮮血を出し、それで判をおした。兄はこれを喜び、二朱金一片を出してくれた。檜邸（長州藩下屋敷・注）に行く用があるので、帰りにまた立ち寄ることを約束して、兄のもとを去った。

それから檜邸に行き、来原良蔵を訪ねるが不在。置手紙に「急に鎌倉に隠棲しようかと思います。相談したいことがありますので、明日私の所へ来て頂ければ幸いです。また坪井竹槌も一緒ならなお結構です」と書いた。邸門を出るときちょうど良蔵・淡水（赤川淡水・注）が帰って来たので、そのことを話し別れた。

折り悪しく雨が降り出し、日もまた暮れた。はだしのままで上邸（桜田にある上屋敷・注）へ行き、秋良を訪ねる。「今朝の話の事だが、よく考えたんだが暫く待った方がいい。金のことも、他の事に使用するんだったらあげよう。渡航費にするのだったらお断わりだ。ぼくは君のお父さん（杉百合之助・注）と昔から深いおつきあいをしている。もしお父さんがこのことで立腹されたとき、どのように弁解したらいいのかわからない」と秋良はいった。

そこでぼくは「今度のことは、ぼくが一番いいことだと思って決めたことなのです。しかし君の言葉も、もう一度考えなおしてみましょう。金は渡航のためで、他には不用ですのでもう結構です」といい、とぼけて「国運のかかった、重大な時期ももう去ってしまい、今はもう何もすることはないといっていい。むしろ国にあっては力を蓄え、俊鋭を養う時であり、武士は学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

問にはげみ剣術を磨く時だ」などと弁じて立ち去った。

今朝の約束通り、兄のもとに寄るべきだったのだが、話し合っていれば、きっと涙を流すようなことになり、もしそんなことになれば兄に疑惑を与えることになるのは自明だったので、寄らないことに決心した。家に帰り着いた頃は、夜もすでに深まっていた。

**五日**　朝、兄より手紙が届く。昨夜はなぜ来なかったのか、いよいよ何日から鎌倉に行くのか、などの事。だから返事に、「昨夜、夜深けに雨が降ったので、直ぐに帰りました。今日出発ですので、またお寄り出来ないことになりました」と書いた。

まもなくして来原・赤川・坪井・白井・宮部・佐々・松田（重助）らがやって来た。一緒に住んでいる永鳥とも連れ立って家を出、京橋のほとりの伊勢本という酒楼に集会する。ぼくの計画を述べ、皆の意見を求めた。はじめ心から賛成してくれたのは永鳥一人だったが、そのうち皆もこれに賛成してくれた。

ただ宮部は、「これは危険な計画だ」といった。その考えは、全く遺憾にたえなかった。他の者は皆宮部に反論した。来原・永鳥は黙って何もいわなかった。しばらくして来原が突然、「外国の情勢を研究するということは、今しなければならないことなのか」といった。宮部が「もちろんだ」というと、「本当にそうならば、しなければならないことを今するだけのことであって、なぜ成功失敗を心配する必要があるのか。もちろん失敗すればさらし首になる、しかしぼくは寅に後悔させるようなことはしない」と来原はいった。またしばらくして、永鳥はおもむろにいった。「勇敢で行動力があるのは吉田君の長所だが、思慮と慎重さをもって、このことを止めたいと思う。私はこの計画は不可能だと思う」と。

そこでぼくは筆を捫り廻しながら「男子として、やれると思ったから決意したのだ。富士山が崩れ、利根川の水がつきることがあっても、このぼくの決意を、誰が変えることが出来ようか」といったので、宮部も、もう留めることは出来ないと知り、とうとう賛成した。佐々は深くなげきの情をあらわしながら、「日本の滅亡も遂に今日の状態に至った。君は一体それをどのような方法で救おうと思うのか」といった。ぼくも、また知らず涙を流していたが、ついに「寅は、絶対にこの危険な計画を実行します。もちろん失敗してこの首を鈴森（江戸品川の刑場・注）にさらすことは、覚悟の上です。しかし諸君、今日から一人一人が、何か一つの事で国に酬いるならば、たとえ成功失敗がその間に

あるとしても、どうして国家のためにならないことがあるだろう。頑張ろうではないか」と誓いをいったので、一堂の者も大きくうなずいてくれた。

こうしている間に、日も西に傾いたので、皆に永久の別れを告げて、独り先に家に帰り、渋木と相談し、身仕度に取りかかった。そこへ家主（鳥山新三郎・注）が外出先から帰って来た。悲しげな様子なのでそのわけを聞くと「郷里の弟を亡くした」ということだった。ぼくも一緒に悲しみの涙を流した。

それからしばらくして今日皆で決めたことを彼に話す。彼もまたぼくのために涙を流して「私は貴方がこを去られるのを大変残念に思いますが、しかし、貴方も深い決心をなされている様子なので、お引きとめはしません」といった。

彼が持っている『唐詩選掌故』二冊を欲しいというと、餞別にと差し出してくれた。家にある衣服類を売り払い、なにがしかの金を得た。海外万里の彼方に行こうというのに、その旅装は小さな袋一つだというのだから、まったくおかしな話である。さてその袋の中にあるものは、小折本の『孝経正文』一冊、『和蘭文典』前後編、『訳鍵』（オランダ語の字引。文化七年〈一八一〇〉藤森泰助編・注）二冊、『唐詩選掌故』二冊、『抄録』数冊、ああこれまたつつましやかなものである。

仕度がほぼ終わった頃、外はもう暗くなっていた。先の友人たちがまた集まって来た。そこで家主を誘って一緒に外に出、表通りで佐々と別れた。彼の頬にはまだ涙のあとが消えずにあった。そして路費として金五両と、着物一そろいをくれて、去って行った。永鳥は輿地図（世界地図・注）一軸を贈ってくれ、宮部は彼の差している刀と、私の刀とを強引に交換し、また神鏡一面をくれた。それから

皇神の真の道を畏みて
思ひつつ行け思ひつつ行け

の歌一首を口ずさんでくれた。

鍛治橋のたもとで郡司に逢う。何も話さずに一礼して別れた。赤川・来原・坪井・白井らは急に見えなくなった。宮部は木挽邸に寄るため、また私は象山（佐久間象山。松陰は象山から深い影響を受けていた。今度の渡航のことも、象山にけしかけられたものであった・注）の家に立ち寄るため、渋木・鳥山・永鳥らと、赤羽根橋で落合うことを約束して別れた。

ちょうど象山は横浜（横浜警備の任務についていた・注）に滞在している時だったので、家の者に会い「急ぎませんが、必ず直接先生にお渡し下さい」といって、

手紙をことずけた。その内容は――生活費に困って、このままでは江戸に住むことは出来ませんので、鎌倉の山中に隠棲し、学問に専心したいと思います。また何時お会い出来るかわかりませんが、とても残念です――というものであった。終わりの所に、去年長崎へ行ったとき（プチャーチンの軍艦が長崎に寄航したとき、それに乗り込むつもりであった・注）象山が送ってくれた詩と、同じ韻を踏んだ古体の短詩を書き添えておいた。

象山の家を出て、赤羽根橋に急いで行ったが、皆よりも早く着き、橋の所でしばらく待った。渋木・永鳥・家主は来たが、宮部はいくら待っても来ず、しばらくぶらぶらあたりを歩いて待ったが無駄だった。心残りで仕方がなかったが、どうすることも出来なかったので、永鳥・鳥山と別れ、渋木と一緒に、西方に急いで旅立った。

あとで聞いた所によると、宮部は余り急いだために道を誤り、まっすぐに三田に出て、それから神奈川で一泊し、ぼくらに会えなかったのを残念に思いながら去ったということであった。ぼくら二人は、夜を押して保土谷にいたり一泊した。夜が短いうえに、八里の道のりを歩いて来たので、もう空は白みかけていた。

**六日** 晴。保土谷の宿で一睡、午前八時過ぎに起きて、アメリカ船に差出す嘆願書を持ち宿を出る。そのあたりを散策し床屋、風呂屋に行ってから宿に帰り昼食をとった。

いったん荷物を宿に預けて、それから横浜へ外国船停泊の様子を見に出かける。横浜で、偶然象山の下僕銀蔵に出逢う。ぼくは、今は象山に逢いたくなかったが、外国船に近寄るための、いい案も思いつかなかったので、銀蔵に、漁師をなんとか口説いて外国船に近寄り、見物する方法はないものだろうかとたずねてみた。すると銀蔵は、「それはちょうどよかった。今夜主人（象山・注）が、漁師に扮して外国船を見物に行くことになっていますが」といった。ぼくはそれを聞くや喜びを押え切れなくなって、象山のもとへいそいで駆けつけた。「すべてはうまくいった。今夜皆が寝静まってから決行しよう」ということであった。

ぼくはすぐ保土谷に帰り、荷物を手にして、午後八時頃にまた横浜の象山の所に行った。ところが漁師たちは、夜間に船を出したりしてとがめを受けることを恐れ、初めの約束に反して行くのを断わった。しかしおおっぴらに喧嘩も出来ないことなので、その夜は象山の宿舎に泊った。

**七日** 晴。象山は「浦賀の組同心吉村一郎というも

のが、近頃神奈川に勤めているとかいうことである。この者に紹介状を書くから、外国船に水や薪を供給する官船に乗って、外国船に近づき、よく観察してくるがいい。そうすれば船中の様子もよくわかるだろう。また場合によっては外国人の顔をよく憶えておき、計画の助けになるよう心掛けておくのもよい」といった。

そこでその象山の紹介状を持って、村の漁師をやとい、神奈川へ行った。この漁師はまた非常に変わっていて、外国の事をいろいろ調べたり、外国人の絵などを面白がって画いていたが、なかなかうまかった。そこでぼくは、彼らと一緒に計画の実行をしようと決め、神奈川へ行って吉村を訪ねることは止めた。夜になったら、またこの舟に乗って横浜に帰る約束をした。

大槻平治（仙台藩の医者の出身で、江川太郎左衛門に砲術をならい皆伝をうけていた・注）がちょうど神奈川に来ていたので、彼を訪問した。というのは、彼は漁舟に乗って外国船に近づき、詩を作って羅森（ペリーの通訳として同行していた支那人・注）に送ったということを耳にしたので、何かいい考えはないものかと思ったからである。

それから酒楼に上って、酒を並べ、さきほどの漁師を招いて飲みたいだけ飲ませ、酔ったところを様々にとりなして勧誘したので、彼も遂に外国船に近づくことを承諾した。だからもう計画は成功したような気になっていたのだが、しかしこれは考えてみればずいぶん軽卒で浅慮なことだった。というのは夜になって舟に乗り、ふんだんに金をやって外国船のもとに行くように命じたところ、漁師は、いざとなるや尻込みをし、帰ろうとするのである。ぼくがいろいろなだめすかすのだが、彼は頑強に聴き入れようとしなかった。だからやむを得ず、また横浜に上陸という破目になったのである。

偶然、象山が一人の下僕をつれて横浜を歩いているのに会った。そこで自分の失敗談をくわしく話し、また象山の宿営に一泊した。この夜、象山はまた一人の漁師を説得して、午前二時頃に外国船に近づく計画を立てていた。六日の日に書いた「投夷書」を出して象山に見せた。すると彼はそれを添削してくれた。渋木は酒を飲んだあと船に乗って、海が荒れていたため頭痛と目まいを起こし、早く寝床についた。しかしすぐなおった。午前二時になったが、海上は風が強く波も荒いので、船頭はそのまま帰っていった。象山・渋木と海岸に行き、波を眺めてうらめしく思いながら帰った。

**八日**　雨。昼頃まで象山の宿営で酒を飲み話しあった。昼食後、本牧へ行き、地形や海の様子について調べる。海は、波が山のようにうねり、荒れ狂っていた。宿営に帰ってから、またしばらく話し合う。四時頃から、保土谷の旧宿舎へ行った。永鳥はぼくの事を心配して、この日ぼくより先に保土谷の宿屋に来ていた。

それから赤羽根橋で別れてからのことを、夜までいろいろと二人で話しあった。そしてその夜、「投夷書」の別啓を書き加えた。その別啓の中で「横浜村の南側は、海岸は断絶していて人家もない所なので、午後八時頃、火をともして合図をするから、ボートで迎えに来て頂きたい」と書き加えておいた。その場所は、本牧へ行った時にくわしく調査しておいたのである。

**九日**　晴。朝、永鳥を宿屋に残しておいて、渋木と神奈川に行き、吉村一郎を訪問して象山の紹介状を手渡した。ところが吉村一郎は勤務交替で、浦賀に帰ろうとするところであったので、あとのことを鯛屋三郎兵衛に一任して去っていった。そこで鯛屋三郎兵衛の所に行って、都合を聞いてみたところ、今日は薪水積入れの船は出ないから、明日きて待つように、ということであった。

ちょうどこの日、外国人が横浜に上陸したということを聞いたので、彼らに会おうと、突っ走っていった。うまく機会をとらえて、嘆願書（投夷書・注）を手渡そうと思ったのである。しかし着いた時は、すでに外国人の立ち去ったあとだった。渋木は、大きな嘆息をし、今にも泣き出さんばかりに、「いったい天は、ぼくらがこの計画を実行することに反対なのだろうか。どうしてこう、物事がちぐはぐになり、このように失敗ばかりするのだろうか」といい、また「危険を怖れていて、どうして成功することがあろうか。今夜舟を盗んで、直接外国船に横付けすべきだ。幸いに今日は天候も穏やかで波も静かだし、そのうえぼくは舟の操ぎ方も少々心得ている。だからぼくがそれをやります」といった。そこでぼくは「君がやろうというのなら、どうしてぼくが反対などしたりしよう」と答えた。

そこで二人で海岸を探し歩いていたら、二隻の小舟があるのを発見した。ただ櫓がなかった。しかしそのあたりの漁家をよく見廻していたら、小さな空屋の一つに、櫓が幾本か置いてあるのが見つかった。それでぼくたちは、「うまくいった」と喜び合ったのである。

急いで保土谷の宿屋に帰った。ところが数日前から、

夜中に宿屋を出たり入ったりして、その行先や行動がよくわからないものだから、宿の主人が非常にぼくらの挙動に対して不審を抱き始めていた。そこで今夜江戸に帰るのだということを口実に、午後四時頃宿屋を出ることにした。途中でカンテラ一個を買った。

神奈川台に行き、酒楼に上って、わざと盛大な酒宴をおこなって、夜中の十二時頃また横浜に行った。ところが昼間見つけておいた小舟二艘は、漁師が乗っていったのか、もう何処にもなかった。その上、空は暗黒で、風が吹き出し、海上の波は荒れていて、昼間の計画は全て狂ってしまった。だからもう「海を渡ろうにも船はなし、一体どうしたらいいのだろうか」と落胆するだけであった。

この時、その附近の村の犬が群がって来て、ぼくたちに吠え出した。「泥棒をするということが、こんなにむつかしいことだとは、今初めて知ったよ」とぼくは苦笑しながら渋木にいった。

今夜こそは、そう思ってここに来たのだが、事態はまたこんな具合だったので、いい思案も浮ばないまま、遂にまた保土谷に引き返した。着いた頃、雨が降り出し、夜も明けかけて来た。またもとの宿屋にもどったものだから、宿屋の主はますます疑いの目を向けて来た。

永鳥はまだ宿に滞留していた。「また失敗したのか」そう彼がいったので、ぼくは笑って「計画が失敗すればするほど、決意はますます堅固になっていくんだ。これは天がぼくを試しているのだ。なんでへこたれてなるものか」といった。しかし渋木は憤りを面にあらわしていた。

**十日**　雨。宿屋でのんびりとする。昼頃に、来原・赤川が雨の中をやって来た。しばらくの間皆でいろいろと計画を練りなおす。それから一緒に神奈川へ行った。来原・赤川はそこからすぐに帰った。

永鳥と二人で、神奈川宿の浜屋という宿屋に泊った。宿の主人は永鳥源吾といい、七〇歳を越える年齢であったが、非常に元気で、一人前の男にも引けをとらないほどであった。また有名な岡引（捕吏の手先・注）だったから博徒たちでその名を知らない者はないということである。

ある日、アメリカ人の下僕が一人、神奈川に上陸し、江戸へ行くため川崎の六郷川まで来たとき、この老人が一足先きに川に走って来ており、渡船のすべてを押えてしまっていた。だから下僕は江戸に行くことが出来ずに立ち去ったということである。彼は自分からこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com